



## かさを出せ

---

「か！、か！、か！、・・・かさを出せ」  
おじいさんが叫んだ時、おばあさんが出してきたのは  
大きな大きなかさ。まるで二人の人生をすっぽり包んでしま  
うような大きなかさ

笑いの中に人生の悲しさを映し出す掌編戯曲。

「かさを出せ」

人物

文吉 男、八十五歳

うめ 女、八十歳、文吉の妻

登志子 女、四十五歳、洋介の母親

洋介 男 十八歳

ユキ 女、十六歳、洋介の女友達

或る町の町はずれにバスの停留所がある。舞台中央に屋根のないベンチと、停留所の標柱が置いてある。登志子とうめがバス停のベンチに腰をかけ、車いすの文吉がその横にいる。ユキと洋介がバスの時刻表をみている。

ユキ (誰にともなく) ねえ、どこの銀行にするの。

登志子 どのたつて、この辺には銀行は二つしかないわよ。

洋介 りんご銀行なら駅前だから直ぐ来るけど、みかん銀行は隣の町だから三時間は待たないとバスが来ないよ。

登志子 別に急がないし、駅前是人がいっぱいでしょう。

みかん銀行でいいんじゃない。ねえ、おばあちゃん、そのほうがいいでしょう。

ユキ じゃあ、みかん銀行。(登志子を押し退けるようにして、ベンチの端に立ち上がり) あ、見て、あんな所に見えるわ。

登志子 ちよつと、こんなところに立ち上がらないでよ。

洋介、この子の頭どうかしてるんじゃないの。ガールフレンドはもつとマシなの選りなさいよ。

洋介 何が見えるんだい。

ユキ ほら、新聞に出てた新しいスーパーじゃないの、あのでっかい風船。

登志子 「アピカ」でしょ。あんなとこ広いだけで、品物だけは多いけど、安物ばかりよ。それに、こんなところから見えないでしょ。

ユキ 見えるよ。(うめに)、ねえ、おばあちゃん、見えるわよね。

うめ (ベンチに立ち上がりながら) ほんとだ。こんなところから見えるんだね

登志子 (同じように立ち上がり) うそ、見えないじゃないの。ふたりともウソいわないですよ。

ユキ 見えるよね。おばあちゃんにも見えてるんだから、おばさんがおかしいんじゃないの。ねえ、おじいちゃん。

うめ おじいさんには無理ですよ。もう、身体も思っようにならないうし、目だっつてほとんど見えないんですから。

ユキ (文吉に) ねえ、おじいちゃん、何してるの。朝から何にも言わないし、何だか仏さまになったみたい。

登志子 ほんとだ。もう死んじゃったと思ってるんじゃないの。死ぬのはやめようって昨日ちゃんと言ったのにな。

文吉が突然、車椅子の前についているカバンから双眼鏡を取り出して、何かを見つけたのか熱心に遠くのほうをみている。

うめ (文吉の前に回って双眼鏡を取り上げながら) また覗いてる。若い子を見るとすぐこれなんだから。

洋介 なんだ、まだ、仏さんにはなっていないみたいだね。

ユキ それに目だっつてすっかり見えてる。

うめと登志子とユキの三人が椅子に座る

ユキ ねえ、自爆テロに行く人って、今まで見えてなかった回りのものが急に何でもはつきりと見えるようになるんですって。

洋介 なんだい、それ、じいちゃんやばあちゃんは自爆テロに行くんじゃないんだぜ。

ユキ 分かってるわ。銀行強盗でしょ。自爆テロと似たようなものじゃない。

洋介 そうだ。そういえば似てるな。でも銀行強盗なら死ぬことはないからな。

ユキ 死ぬのなんて簡単よ。だけど、銀行強盗って邪魔くさいんじゃない。うまくやるためにはいろいろ考えなきゃいけないしさあ。

登志子 (いきなりユキの手首を掴んで) リストカット。

そういえば新聞に親を殺して死のうとしたバカな女の子

が出てたけど、あれあんた。

ユキ（いきなり洋介に抱きついて）洋介、いつしよに死ぬか。このおばさん、殺してさ。

登志子 あんた、離れなさいよ。洋介は大事な息子なのよ。

登志子が持つていた傘でユキの背中を殴る。ユキはうめのところに逃げる。

ユキ でも、なんでおばあちゃん達が銀行強盗なの。

洋介 このおばあちゃん達は気の毒な人達なんだ。

登志子 そう、とつても気の毒な人達。

洋介 じいちゃんもおばあちゃんも長い間、小さな工場だけとでまじめにコツコツやってきたのにね。

登志子 でも、バブルの後の不景気で一気に借金が膨らんで工場は倒産。

うめ うまい話に乗せられてあの頃に無理をしすぎたのがいけなかった。

洋介 あの頃は小さい会社も調子に乗りすぎて銀行から借りすぎたので、どこの会社も苦しんでいるってお父さんが言ってた。

うめ でも工場を大きくしなさいって進めてくれたのは銀行。いけないうつて分かったら、トタンに融資を止めて、

鬼のように借金の取り立てにきたのも同じ銀行。

登志子 切羽つまつて、町の金融業者から高いお金を借りたのが運のツキ。

ユキ それで、二人でいつしよに死のうとして海に行った時、洋介のお父さんに助けられたんだ。

うめ 私たちは家も工場もすっかり借金のカタにとられてしまつて、シヨックでおじいさんはボケてしまつし、でもこの人たちに親切にしてもらつて。

洋介、ユキ、登志子の三人がうめと文吉の後ろに並ぶ。

洋介 お父さんは生きる気力を無くした年寄りの人を、ただ慰めたり励ましたりするだけじゃ問題の解決にならないといつてた。生きる気力を持てる何かを捜してあげないといけなんだと。

登志子 そうよ。大切なのは只生きているだけじゃなく、

どのように生きるかだわ。

洋介 まだ終わっちゃうくない。じいちゃんとおばあちゃんの人生をメチャクチャにした銀行に思い知らせてやりたい。生きる気力って結局そういうことじゃないかな。

ユキ そうよ、おじいちゃんもおばあちゃんも銀行と戦うのよ。そしたら、死ぬなんてこと考えないですむよ、生きていけるよ、きっと。

洋介 でも銀行と戦ったって、どうしたらいいんだろって僕たちは考えたんだ。

登志子 待って。戦い方よね。銀行強盗はどうかしら。りっぱな戦争でしょって私が言ったの。

ユキ 銀行強盗って悪いことなんじゃない。

洋介 悪くなんかあるもんか、あいつらは銀行強盗を防ぐための訓練をしているんだぜ。いうならば、軍隊なんだぜ。

登志子 そうよ。これは戦いよ。正義の戦いよ。おばあちゃん、私たちがついてるわ。おじいちゃんと二人ならきっと成功するわ。八十歳の銀行強盗なんて、誰も思いつかないわよ。

ユキ (洋介に) ねえ、私たちもやってみようか、銀行強盗。じいちゃん達に出来るんなら、きっと私たちにも出来るよ。それにお金欲しいし、うちの親ケチでしょ、お金くれないのよ。私が銀行強盗やったら、きっと驚いて態度替えると思うんだ。

洋介 そうだな。面白そうだな。

登志子 バカなこと言わないで。これはおじいちゃんとおばあちゃんの問題であんたたちは関係ないの。それに洋介あんたまだ十八でしょう。このフーテンに誘われて変なことするんじゃないのよ。

洋介 十八だから何なんだよ。

登志子 未成年じゃない。未成年はまだ銀行強盗は許可されてないのよ。

洋介 (ユキと顔を見合せながら) 未成年は銀行強盗は許可しないって法律あったっけ。

ユキ 知らない。酒やたばこが駄目だったのはこの間学校で注意されたからわかったけど、でも今さらたばこが駄目だっていわれても、もうずっと吸ってるし、よくわかんないけどね。

登志子 とにかくこれはあんたたちには関係ないのよ。おじいちゃんとおばあちゃんがやらなくちゃ、世の中の人

はわかんないのよ。

洋介 そうだな。俺たちはそんなに銀行を憎んでないしな。まあほどほどに幸せだしな。幸せな人間には銀行強盗は無理だよ。意味ないよ。

ユキ でもおばあちゃん。大丈夫なの。本当に強盗するって大変だと思うよ。

うめ 大丈夫よ。私たちは昨日教えてもらった通り、りっぱにやるよ。

洋介 そうだよ。これはジハードだ。正義の戦いだ。俺たちがついでるよ。じいちゃん達はきっと世界中の人から英雄といわれるよ。

登志子 おじいちゃん。はっきりと窓口の人にいうのよ。

「金を出せ」って

ユキ おじいちゃんのこと、わかんないかも知れないよ。

洋介 もう一度、練習してみようか。昨日のように。ねえ、おばあちゃん。

うめ はい、はい、さあ、おじいさん、しっかりして「金を出せ」って言って下さいよ。

登志子 さあ、おじいちゃん、言うのよ。「金を出せ」

文吉 か！、か！、か！。

ユキ おじいちゃん、頑張れ。

文吉 か！、か！、か！

登志子 もう少しよ、しっかり

文吉 か！、か！、か！

洋介 (突然、手の平を出して) あ、雨だ

ユキ ほんとだ。雨が降ってきたわ。

文吉 か！、か！、かさを出せ！

突然雨が降ってくる。登志子と洋介とユキの三人は慌てて舞台の袖に走去る

うめが大きな傘を取り出して、文吉と二人でその傘の下に入る。

舞台は急に暗くなって、うめと文吉の回りだけに光があたる。

うめ おじいさん、「金を出せ」なんて言わなくてよかったですね。私達には無理ですよ。銀行強盗なんて、やりたくもないですよ。

あの人たちは親切な人達だけど、結局は幸せな人達だけ

ら私たちの悲しみなんか、わかるもんですか。何がジハードですか。誰が喜んで死ぬ人なんてあるもんですか。みんな幸せな人達がかつてなことを言ってるだけなんですよ。

おじいさん、私たちにはこの小さな傘がひとつあればそれでいいじゃないですか。こうして二人で生きてきたんだから、何にもなくなっても世間に忘れられても、死ぬまでこうしていたらいいじゃないですか。ね、いつまでも、こうして・・・。

次第に暗くなってうめと文吉の姿が見えなくなる。

(幕)